

---

# アップルティーは甘く。

朔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アッフルティーは甘く。

### 【Nコード】

N6550Q

### 【作者名】

朔

### 【あらすじ】

「ぼく」と「彼女」の日常的な風景。

画家と作家にまつわる一風景。

「締め切りに間に合わん」

と、彼女は叫んだ。部屋中に響き渡る彼女のいつもより二オクタ  
ーヴも高い声は、ぼくの飲んでいた紅茶とところを、ふるわせた。

紅茶はもう冷めていたが、これは彼女が淹れてくれたものなので  
飲み切らなければならぬ。そんな勝手な概念で、ぼくは紅茶を飲  
んでいた。

味はしなかった。

アップルティーに、たつぷりと冷蔵庫から取り出したばかりのミ  
ルクが注がれていく光景を、ぼくは微笑みながら見ていた。

家事ができなくてもかまわなかった。彼女のそういうところが好  
きなのだ。彼女自身のことが、最低限できていれば別にどうでも良  
かった。たとえばトイレや風呂や、その他もろもろのなにか。この  
紅茶も、どうしてぼくの方まで淹れてくれたのか、はなはだ疑問だ  
った。

そして、何ともいえぬ飲み物から生み出された微妙な味を感じて  
いるのかいないのか、彼女はそれを一気に飲み干したことも。

「うっむ」

彼女が断続的に唸っている。ぼくは微笑みながら彼女を見ている。  
きつと彼女は、締め切りという強制スクロールに耐えられないの  
だろう。いや、耐えるだけの神経は有しているが、今回はだめなの  
だ。たったそれだけのこと。ぼくが口をはさむべきところではない。  
ぼくにできることは、ちゃんとした味のアップルティーを彼女に飲  
ませてあげることだけだ。

「今日はもう寝るわ」

「うん」

彼女はそう言い放ってこたつに潜り込んだ。年中無休でそれは僕  
の家で従事している。きつと彼女のことを一番わかっているのは、

疑う余地なくそれであろう。

彼女の寝息が一定のリズムを刻むようになってしばらく、ぼくは彼女の寝顔を見ていた。

綺麗だ。

ここ数週間、ろくに家を出ないで過ごしているので日に灼けていない首筋はしるく、あかい血管を透いている。髪は伸ばしっぱなしで、自然にウェーブの掛かる髪はどこか西洋の魔女を思わせる。次の作品を書き上げるまで、あとどれくらいかかるだろう、と想像してみる。

破綻。

いまの彼女の様子からは未来は未定であって、ぼくには容易に推測できかねる。ということば、ぼくが彼女の髪をばつさりと切つてその黒い髪にストレートをかけて大正時代の少女を思わせるようなおかつぱにするまでに、どれだけの時間をぼくに悶えさせるのか、想像の範疇を超過しているということだ。

「画用紙は」

とぼくは静かにつぶやいた。もしや唇が震えただけかもしれない。幸い、隣の部屋　―売れない画家のアトリエー　には多くの画材がある。ぼくはそこに足音を立てずに向かって行き、扉をあけて、スケッチブックと近くに転がっていたHBの鉛筆を握りしめた。そしてもとの場所と寸分狂わぬ位置に戻つて来、彼女の顔を今一度覗き込んだ。

眼球をスケッチブックと彼女の身体を行ったり来たりさせながら、筆圧の強い線を紙に描きながっていく。

眼球は情報処理に対してあくまで一方通行を貫き通して、ぼくの神経を過剰に消耗させた。描き続けていて、久しぶりにこれだけの消耗を味わっているような気がする。

髪のひとつじひとつ、睫毛のひとつひとつ、皺のひとつひとつ、まるで見逃さない。まるで釣り人のこと気にするそぶりもな

く優游と泳いでいる美しい魚を逃すまいと躍起になっているようす。しばらくののち、ぼくは描ききった。それらを逃さずに。

釣り人は、美しい魚を釣り上げた。

ひどく疲れていた。

うむ、画家の産みの苦しみとはこの程度であろうかなだろうか。

ぼくは売れない画家でありながら描くことに対して努力を嫌っていたので、今までこのようなものを感じたのがなかったのだ。

……ぼくは、産んだのだ、初めて。

そんなことはつゆ知らず、彼女は眠りの泥の中を、変わらず泳いでいる……美しい魚。それが少し微笑んだように見えた。

それを見ると、ふっ、とぼくは、その場で泥に吸い込まれていくのを感じた。眠りの泥へ。

太陽が吠えた。明るさがぼくを襲うと同じくして、

「これ、あたし？」

とぼくの身体をゆさゆさと揺らしながら、彼女はぼくに訊きつつけていた。

「ああ、うん」

ぼくはかすれた声で返す。喉に水分が足りていない。

「綺麗」

「うん」

ぼくはずっと立ち上がり冷蔵庫へ向かってミネラルウォーターをコップに注ぎ、飲んだ。そして同じものをもう一杯用意して、それは飲まずにもとの場所へと戻る。

「こんなに見たのはじめてやわ」

「うん」

ぼくは彼女に水の入ったコップを渡す。彼女はそれを一気に飲み干して、空になったコップをぼくに返した。そして話し出した。

「あたしの処女作は、『水はなんで透明なんやろう？ 透明っていうのは見えないってことやないの？ 透明人間は見えないからこそ

科学的に証明できへんのやし、おるとわかったらそれはそれで透明人間やない。やのにみんな水は透明や透明や、って言いよる。見えないものが見えるってのは特別なんと違うん？ 水は誰もを特別にしよるん？ 違うよ、水は透明と違う。透明感をまとつておるだけや』っていつのをずーっと書いたもんやった。自分でさえもわけがわからんまま書き始めて、透明感っていうことばの定義にたどり着いたときの幸せったら」

「……うん」

ぼくのあるかないかの返事を聞かずに、彼女はどんどん音をたてながら立ち上がって、本棚からその処女作を取り出してきた。

そして、静かに、最後のほうのページの朗読を始めた。

「……水が透明であるとしましょう。そうすればなぜ、今さきほど運ばれてきたお冷やの向こうに映り込んでいる彼のその綺麗な指先は、こんなにも儚げに揺れているのでありましょう。わたしの身体が小刻みに震えているのは知っていますがなぜ、それによつて彼の指先は、その綺麗で綺麗で、けれどもわたしには触れることが許されない指先は、同じように小刻みに震えているのでありましょう。水は透明である約束ならば彼の指は震えて見えることもありません。」

「……それはきつと、水が透明感をまとつている何かだから。けれど、何かを追求するのはとてもわたしにはできません。小刻みに揺れていたその水は、わたしの生み出した振動で揺れていたのと同じくして、わたしの心と同じように揺れていたからです。なぜわたし自身に、わたしの心を追求せねばならないのでありましょうか、わかりきっていることをどうして。」

読み終えて、ハードカバーの本の閉じる独特の音。

ぼくは聞き入っていた。なにか、彼女には心を震わせるものがある。水のような透明感をまとつたなにか。

昨日の夜、無心で描き殴った絵を見る。自分で見てもかすかに透明感をまもっているように感じる。たとえば、髪の毛のひとすじの先端に、睫毛のひとたばの先端に、皺のひとつひとつの先端に。

彼女は目をつぶって深く深呼吸をしていた。

自分の産み出したものをことばにして空気をふるわせて、漂っているそれを吸い込んでいるのだ。

彼女を邪魔をしないよう、ぼくはキッチンに立ってポットから熱い水が出るのを見ていた。たしかに水は透明ではない。透明感をまもっている何かだ。しかし果たしてそれがなんであるかをぼくは知ろうとはしない。彼女と同じように。

彼女が顔を上げた。

ぼくは微笑んで彼女のもとへと向かい、一度彼女をやわらかく抱きしめた。

そしてキッチンへ戻り、甘いアップルティーの入ったマグカップを渡した。

部屋中に、透明な湯気のかおりが甘くひろがっていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6550q/>

---

アップルティーは甘く。

2011年2月5日01時36分発行